19 尿検査で異常を認めない排尿痛に対し猪苓湯合四物湯が有効であった一例

千葉中央メディカルセンター和漢診療科
太田　陽子、地野　充時、寺澤　捷年

【諸言】排尿痛をきたす疾患は様々なものがあるが、明らかな原因を認めず、西洋医学的には治療に難渋する例も多い。一方、原因不明の排尿痛に対し、漢方治療により症状の改善が得られる症例も散見される。今回我々は、尿検査で異常を認めない排尿痛に対して、猪苓湯合四物湯が有効であった一例を報告する。

【症例】84歳女性。主訴は排尿痛。以前より便秘症に対して当科外来でフォロー中であった。経過中、排尿痛が出現した。脈候はやや浮・やや数・やや実、腹候では腹力中等度で平腹、尿検査で異常所見を認めず、間質性膀胱炎様の症状と考え、乙字湯から猪苓湯合四物湯に転方した。

【経過】猪苓湯合四物湯開始4週間後には、尿の出が良くなり排尿時痛が軽快したが、まだ疼痛が残存しているとのことであった。さらに1週間後、排尿痛は2日に1回で、早朝尿のみとなった。内服開始3か月後には、排尿痛がほぼ消失し、その後も症状の再燃なく経過している。

【考察】本症例では、排尿痛や尿が出にくいといった排尿障害以外の有意な所見を認めず、臨床的に間質性膀胱炎と診断した。このような症状に対して用いられる漢方薬として、猪苓湯、竜胆瀉肝湯、清心蓮子飲、加味逍遙散、当帰四逆加呉茱萸生姜湯、安中散など、様々な処方の報告がある。本症例で用いた猪苓湯合四物湯は、利水作用および清熱作用を有する猪苓湯と、血虚を改善する四物湯の合方である。四物湯には止痛作用を有する芍薬も含まれる。従って、猪苓湯合四物湯は、疼痛および尿量の改善に寄与したと考えられた。また間質性膀胱炎では、膀胱粘膜の点状出血や膀胱の慢性炎症をしばしば認めるが、これは和漢診療学的には血虚の病態である。我々が渉猟した範囲では、間質性膀胱炎に対して猪苓湯合四物湯を用いた報告は認めなかったが、本症例により、本処方が有効である可能性が示唆された。間質性膀胱炎など排尿異常をきたす疾患の治療は、保存的治療から外科的治療まで多岐にわたるが、より低侵襲で副作用の少ない薬物療法の一つとして漢方薬を用いることは、有意義だと考えられる。